

高齢者の第三の場としての公立図書館
—つくば市立中央図書館を事例として—
Public Libraries as Third Places For Seniors
- A Case Study of Tsukuba City Library -

学籍番号：201721711

氏名：FENG YUTING

日本は超高齢社会を迎えており、今後も公立図書館を利用する高齢者の増加が見込まれることから、超高齢社会における公立図書館の役割を改めて考えることが必要である。その際、高齢者の社会参加を促すという視点から、誰でも気軽に集まり会話を楽しめるという「第三の場」の視点が有用であると考えた。

本研究では公立図書館が高齢者の第三の場として機能する可能性を検討することを目的として、つくば市立中央図書館（以下、中央図書館）を事例として取り上げた。2018年9月から2018年10月にかけて、中央図書館の高齢利用者10名を対象として、利用頻度・方法、中央図書館に対する印象や評価などに関する個別インタビューを行った。

主な調査結果として、(1)利用者同士の会話経験がある者が少なく、図書館職員との会話は図書館サービス関係が主であったこと、(2)雰囲気について好意的なコメントは多数あったが不満もあること、(3)資料を利用することによって楽しさを感じる、または元気をもらった経験のある者が多数であったこと、(4)用がなくても気軽に行ける場所と比べ、図書館は無料で利用できる施設であるという意見が複数見られたこと、(5)中央図書館に気軽に行けて他者と会話できる場所を作ることについて肯定的な見解と否定的な見解が半数ずつであったこと、(6)中央図書館は調査協力者の日常生活において大事な場所であることが明らかになった。

また、第三の場の(1)中立な領域、(2)人を平等にすること、(3)会話が主な活動であること、(4)アクセスしやすく・協動的であること、(5)常連がいること、(6)建物が目立たないこと、(7)陽気で遊び場的な雰囲気、(8)家を離れた時のもう1つの家であることという8つの特徴、及び個人にもたらす(1)目新しさ、(2)積極的な人生観、(3)元気の回復、(4)ひとまとまりの友達という4つの利益を指標として、第三の場としての機能について検証した。その結果、中央図書館は、(1)中立な領域、(2)人を平等にすること、(3)常連がいることの3つの特徴を満たしており、館内所蔵の資料を通して、高齢者は(1)目新しさ、(2)積極的な人生観と(3)元気の回復の3つの利益を得ていることが明らかになった。

文献調査を及びインタビュー調査の結果を踏まえ、日本の公立図書館が高齢者の第三の場として機能するには、利用者を区別せず誰でも利用できるという、第三の場と親和性が高い要素を保持する必要性を論じた。また、これからに向けた取り組みとして、(1)高齢者が興味を持つイベントや行事を開催すること、(2)物理的基盤としての館内空間を考慮すること、(3)図書館職員の世話人としての役割を重視することの3つを挙げた。

研究指導教員：呑海 沙織

副指導研究教員：溝上 智恵子